

聞き書き

日本時代の朝鮮人警察官の回想（2）

柴 公也（熊本学園大学外国語学部教授）

（お詫び） 本誌第3号に掲載した柴公也「聞き書き・日本時代の朝鮮人警察官の回想」は、編集の手違いにより、途中までしか掲載されておりませんでした。よって、当該号に未掲載だった「聞き書き」の後半部を（2）として掲載させていただきます。不注意を深くお詫び申し上げます。（編集部）

（本誌第3号、127頁より続く。）

一年に一回、咸鏡北道の警察署長の会合がありましたが、その際柔道の大会が開かれていました。私は茂山郡の代表として先鋒を任されて活躍し、勇名を馳せておりました。私は、茂山郡の大会では優勝したことがあります。ただ、咸鏡北道の全道大会では七人抜きをしましたが、八人目の城津の選手とは引き分けてしまいました。京城での全朝鮮大会にも出場しましたが、やはり強豪が多く、無念にも一回戦で敗退してしまいました。

茂山警察署では、内地人の警察官が朝鮮人の警察官を苛めたり、蔑んだりしたことはありません。むしろ、朝鮮人と内地人はお互いに敬意を払っていたのです。私は内地人の同僚から信頼されていて、よく相談も受けました。朝鮮人の私が、内地人でもなかなかない警部補に四年目でなったということが、その証左ではないでしょうか。

茂山では外勤は余りせず、専ら本署で柔道の稽古に励んでいたので朝鮮人を逮捕したりすることはありませんでした。そのため、終戦後朝鮮人から報復されたりしたことはありません。

当時、咸鏡北道全体で朝鮮人の警部は2～3人おりましたが、署長はいなかったように記憶しています。道庁には、保安課に朝鮮人の警部が一人おりましたが、50代の人でした。日本語が拙かったことを見ると、学校は出ていない叩き上げの人ではなかったかと思います。

同僚の内地人の警察官とは意見の違いから口喧嘩もしましたが、普段は仲良くしておりました。その頃、私は日本名で創氏改名しましたが、以前から大日本帝国の臣民と思っていましたから、これで自分は紛れもない日本男児になったような気分でした。当時、日本名での創氏改名を勧奨したのは警察ではなく、面事務所の職員や洞長などでした。ただ、日本名で創氏改名をしなければ郵便物を送らないなどということは聞いたこともありません。

当時は、自分のことを内地人とは違う朝鮮人だとは自覚していましたが、同時に大日本帝国の臣民だとも思っていたので、別に矛盾は感じませんでした。ですから、朝鮮の独立などは考えたこともありません。

また、陛下に対しては尊敬しておりましたが、現人神とか権力者とは思っていませんでした。一方、朝鮮の純宗や李垠殿下に対しては、朝鮮人としては尊敬すべき人とは思って

いましたが、日本の傀儡という印象でした。

朝鮮人の男を内地に連行して強制労働をさせたり、女を軍隊に連れて行って慰安婦にしたりするなど、業者と結託して個人的に悪行を働く者はいたかもしれませんが、警察が組織的に狼藉を働くというようなことは、私たちの時代にはありませんでした。当時の朝鮮は現在の北朝鮮や中国とは違って、韓国よりも真つ当な紛れもない法治社会だったのです。

それでも、賄賂はありました。ただ、発覚したら首になるので、業者が警官に直接渡すのではなく、業者が仕事の便宜を図ってもらうために警官の関係者に贈り物として渡すという方法を取っていました。ただ、私の方から賄賂を強要したことはありません。特に、支那人の商売人は裕福で、賄賂の渡し方が上手でした。妻が洋服の生地などを頼むと、その中に10円入りの封筒を忍び込ませるといような手法で、巧みに賄賂を贈っていました。時には、業者から女の接待を受けるということもありました。ただ、支那人は秘密を守るので、賄賂が露見するといようなことはありませんでした。

茂山に5年半勤務した後、羅南の道庁の外事課に移動警察（*自動車や汽船に乗って警察活動に従事する警官）として勤務することになりました。五年前に羅南から茂山に配属された時は、ハンドバック一つと手提げカバン二つで妻と自動車に乗り込んだのですが、羅南に戻る時は、長男と生まれて間もない長女を連れ、鉄道の貨車一杯の家産とともに帰ったのです。自分で購入した物もありましたが、役得でもらった物も少なくありませんでした。ただ、いずれも権力を悪用して蓄財したものではありません。

羅南の家は、オンドルの部屋が二間だけでしたが、子供は長男と長女の二人だけでしたので、別に不自由はありませんでした。後で、次男と三男が生まれて、幾分手狭になりました。

私が日本人との付き合いで学んだことは、正直の美德でした。私は南に来て警察に勤めるようになってからも、「誠実」をモットーに生きてきました。子供や孫たちにも常々「誠実」であることの大切さを説いてきました。お蔭で、子供や孫たちも皆恥ずかしくない立派な社会人として成長したのだと思っております。

羅南に戻って来てから刑事の講習があつて、講師は、「取り調べの際には、拷問などはせずに写真などを撮って、科学的な取調べをするように」と指導しておりました。裏を返せば、まだ拷問による取調べが続いていたということなのでしょう。

道庁に三年ほど勤めて、終戦を茂山で迎えました。終戦の年の7月の下旬に道庁が羅南から茂山に移る際にも、私が道知事を案内して行きました。郵便貯金は千円以上あったと思いますが、それは戦後の混乱でとうとう引き出すことは出来ませんでした。

終戦、つまり日本が負けたと聞いた時は、正直言って悔しかったです。「日本のために一所懸命やってきたのに、なぜ、こんなことになったのか」と、残念でなりません。当時の満洲では日本の権勢は他を圧していましたから、もし負けなければ、自分は間島省の省長になれるという自信があつたからです。その夢が脆くも潰えて、失意の底に沈んでしまったのです。

私は、終戦後、白い朝鮮服に着替え、二日掛りで自転車に乗って峠を越え、羅南の家に戻って来ました。途中、何度かソ連の兵隊の検問に遭遇しましたが、普通の朝鮮人を装って上手く切り抜け無事通過しました。その後は、妻子と郷里の鳳岩洞に隠棲して越南の

機会を窺っておりました。

その後、自分の経歴から北に残っているのは危険と判断し、1946年の8月に、ソ連軍とコネの出来た母方の叔父や妹、それに康徳駅の駅長の助力で、親兄弟を置いて私たち家族だけが越南して来ました。父は既に亡くなっておりました。母には安心させるために二年後に戻って来ると言ってきたのですが、戻るつもりはありませんでした。

韓国では刑事だった経歴を買われて警察に勤めることになり、定年までに、安東、慶州、大邱、ソウルの警察署長を歴任しました。親兄弟と別れて暮らすことになったのは悲劇でしたが、警官としてソウルの署長まで勤めて百歳まで生きてきたのですから、普通学校しか出ていない自分としては満足な人生でした。妻は86歳で先に逝ってしまいましたが、子供や孫たちに恵まれ、それぞれ立派な人間に育てあげたのですから、幸せな人生だったのではないかと妻の遺影に手を合わせております。

〈完〉